

京極御息所褒子歌合注釈（二）

要 旨

延喜二一年（九二二）京極御息所褒子歌合について、一番歌から九番歌まで注釈を施したものである。

キーワード：歌合 京極御息所 褒子 宇多法皇 藤原忠房

伊勢 凡河内躬恒 春日社

はじめに

延喜二一年（九二二）年三月七日に宇多法皇は、寵愛する京極御息所褒子（時平女）、その子で生後一年にも満たない雅明親王（醍醐天皇猶子）とともに、春日社に御幸した。還幸の折、法皇に近侍してきた大和守藤原忠房が、果物籠二十に和歌二十首（一三首は御息所の車、七首は親王の車）を添えて差し上げた（ただし、躬恒の代作が数首あり）。その際は、あわただしく返歌の暇がなかった。そ

岡田 博子
Okada Hiroko
小池 博明
Koike Hiroaki
西山 秀人
Nishiyama Hidehito

こで、帰京後（五月頃か）、忠房の贈歌への返しを、女房たち（伊勢も参加）を左右に分けて歌合形式で行ったのが、京極御息所褒子歌合である。返歌合二十番に夏の恋二番が加わった計二二番で、さらに末尾に右方の負態の歌が存する。

左の頭は宇多法皇皇女源順子、右の頭は褒子妹の時平第五女。判者は、贈歌（歌合本文では本歌と記す）を詠んだ忠房を、わざわざ大和から召した。講師は、左が藏人少将藤原伊衡、右が左小弁紀淑光。左右の念人はそれぞれ赤色と青色の衣服、方人、読師、員刺も美麗な衣装を身にまとい、州浜には趣向が凝らされるなど、仮名日記には盛儀の様子が記される。

この歌合は、贈歌に左方、右方それぞれから返歌をし、その優劣を競う、返歌合の初例である。この形式は、天曆二年に行われた陽成院一宮姫君達歌合に継承されるが、ほとんど類例のない珍しいものであり、歌合史上意義深い。

既に、この歌合は、萩谷朴に詳細な考証があり、旧大系『歌合集』に萩谷による正鵠を射た注釈もなされている。前に記した事柄も、全面的に萩谷を中心とする先行研究に拠った。

にもかかわらず、ここに新たな注釈を試みようとする理由は、現行の本文にある。現行本文が底本とする十巻本には、ミセケチと傍書とによる訂正が多く見られる。そして、現行の本文は、本行本文ではなく、この傍書に従って校訂を行ったものなのである。

しかしながら、傍書は明らかに本行本文とは異筆であり、廿巻本と共通する本文が多くある。確かに、傍書の多くが、和歌の表現として自然で類型的なようだ。しかし、だからといって傍書で本行本文を無批判に校訂してしまつてよいのか、疑問が残る。

というのも、一見不自然で練れていないように思える本行本文の方が、実際の歌合の場を彷彿とさせる、臨場感を伴った表現である場合も、少なくないからである。

たとえば、4 (忠房の本歌)、

さくらばなみかさのかけしこ、にあればゆきとふるともぬれじ
とぞおもふ

の傍線部は、ミセケチで「やまのかけし」と傍書する。そこで、現行の本文は上句を「さくらばなみかさのやまのかけしあれば」と校

訂する。確かに傍書の方が滑らかな表現といえる。しかし、「こ、に」とした本行本文の方が、三笠山の麓の春日社に忠房が法皇を迎えた、その臨場感ではまさるだろう。

もう一例。4への右方の返歌6、

かすがのゆきとふるめるはなみにぞみかさのやまをさしてき
にけり

の傍線部は、ミセケチで「てふ」と傍書する。そこで、現行本文は初、二句を「かすがのゆきとふるてふ」と校訂する。しかし、実際に御幸に供奉し、春日野に降雪と見紛う落花を見た女房の詠としては、視覚に基づく判断を表す助動詞「めり」が適当である。「てふ」では、詠者が目の当たりにしたという臨場感はなくなり、落花を降雪に見立てたのも、全く観念的な操作の表現でしかないことになる。恐らく傍書は、散文に多く使われる「めり」を、和歌により一般的な表現「てふ」に変えたのだろう。

いずれの例も、詠者の体験を反映した本行本文から、より観念的な傍書への校訂はあり得るが、逆は想定しにくいのではないだろうか。

むろん全てにこうした説明ができるわけではない。たとえば、6の歌末は「けり」だが、「はなみにぞ」から傍書にしたがった「けり」が正しいのは言うまでもない。

しかしながら、今挙げた二例が示すように、和歌として自然な、あるいは整った本文と想定されるものが、必ずしも本文の原態を示すとは限らないのではないだろうか。本行本文が原態を示す可能性もありうる、と考えるのである。

そもそも、この歌合に注釈を加えようと言い出したのは西山だが、それはこの歌合に、同時代にはない特異な表現を見て取ったからである。その特異な表現は、本行本文で読むことにより、さらに際立つことになるのではないかと、と今のところ推測している。

こうした所に、新たに注釈を加える意義の一つがあるかと考える。また、多くの先学により格段に進歩した和歌研究の成果を踏まえて、もう一度この歌合の表現を考察する必要もある。

注釈は何回かにわたる予定だが、至らない点が多くなるかと予想される。そうした点を多くの方に是非ご指摘いただき、さらに三人の考えを深め、より充実した注釈にしていきたい。

なお、冒頭に仮名日記がある。ただし三人の興味が和歌の表現に集中したので、仮名日記を踏まえつつ、まず和歌から注釈を始めた。仮名日記の注釈は、別の機会に公にする予定である。

凡例

一、底本には『陽明叢書 国書篇 平安歌合集上』（昭和五〇年 思文閣）所載の十巻本を用いた。

一、本文表記は、底本に忠実に従うことを旨としたが、読解の便のため次の措置を施した。

○漢字は通行の字体に改めた。

○私意により濁点を施した。

○漢字表記は必要に応じて送り仮名を加えた。

○ミセケチは傍線をもって示した。

一、注釈は【校異】【通釈】【語釈】【他出文献】【参考】の項目を立

てて記した。ただし【他出文献】については他集との重複歌がある場合にのみ立項した。

一、【校異】には廿巻本との異同を示した。廿巻本の本文は『陽明叢書 国書篇 平安歌合集上』によった。判読しにくい箇所は萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂一』（平成七年 同朋舎出版）の校異を参酌した。

一、引用文献の主要なものは以下のとおりである。

○万葉集：『新編日本古典文学全集 万葉集』、○その他の歌集：『新編国歌大観』、なお同一歌集で第三巻・七巻の両巻に本文が収載されているものは、歌集名の下に③・⑦の番号を付して区別した。○歌謡：『日本古典文学大系 古代歌謡集』、○歌学書：『日本歌学大系』。○散文作品：『新編日本古典文学全集』

一、先行の論を引く際には必要に応じて論者・論文名・書名・発行年月を明記したが、萩谷朴『平安朝歌合大成』については「大成」の略称で、また同「延喜二十一年（五月）京極御息所褒子歌合」（『日本古典文学大系 歌合集』昭和四〇年 岩波書店）については「大系」の略称で引用した。

注釈

【本文】

本か

1 めづらしきけふのかすがのやをとめをかみもこひしとおもはざらめや

【校異】

○本か一番 本うた歌一 ○〔集付〕今合拾遺一〔ナシ〕 ○こうひしと
—うれしと ○おしもはさらめや—しのはさらめや

【通釈】

めつたにはない今日の御幸に際して、神楽舞を披露する春日の八少女を見て、神も恋しいと思わないことがあるうか。(行幸に供奉する美しい女官たちを見て、神もきつと心を動かすに違いない)

【語釈】

○本か 本歌。忠房が献じた二〇首の歌を題として、それに対する返歌を女房たちに詠ませて二十番の歌合に仕立てた。○めづらしき①減多にない、まれである、②すばらしい、賞美すべきだ等の意があるが、ここでは①ととる。治安三年(一〇二三)十月十三日、倫子六十賀の祝宴で行成が詠じた「珍しき今日のまとは君がため千代に八千代にただくしこそ」(栄花物語・御賀・二四六)と同様、「けふ」を修飾する。○かすが 春日大社。奈良県奈良市、春日山の麓にある。和銅二年(七〇九)平城京遷都の前年に藤原不比等が創建したと伝えられ、藤原一族の氏神として長く尊崇された。○やをとめ 神社に奉仕し、神楽などを奏する八人の少女。「神楽には巫女はつねにはなけれど、やをとめとして八人の巫女相具たり」(顕注密勘抄)。「八少女は 我が八少女ぞ 立つや八少女 立つや八少女 神のやす 高天原に 立つ八少女 立つ八少女」(風俗歌・二四・八少女)。なお、本歌は歌日記によれば御菓子とともに女房たちの車に献じたわけだから、大系が指摘するように、「法皇・尚侍の御幸に供奉した女官たち」をなぞらえてもよいよう。○かみもうこひ

しと 「かみ」は、春日祭の祭神。武甕槌命たけみかすち(常陸鹿島神)、経津主命ふつぬし(下総香取神)、天児屋根命あめのこやね(河内枚岡神)、比売命ひめ(同)の四座。校合本文以下、「かみもうれしと」とする本文が多いが、2に「かけてもこひむ」とあることから本行本文が原態か。○おしもはさらめや 2に「かみし、のば、」とあることから、こちらは校合本文に蓋然性が認められようが、本行本文でも意は通ずるのでこれに従う。「熊野にまゐらせ給うける時、いはた河にてよませたまうける／いはた川わたる心のふかければ神もあはれとおもはざらめや」(続拾遺・神祇・一四五九・花山天皇)

【他出文献】

拾遺集・卷十・神楽歌・六二〇

延喜廿年亭子院のかすがに御幸侍りけるに、くにの官廿一首歌

よみてたてまつりけるに

藤原忠房

めづらしきけふのかすがのやをとめを神もうれしとしのばざらめや

拾遺抄・卷九・雑上・四三一

延喜廿年二月、亭子院春日に御幸ありける時、国司和歌廿首よ

みてたてまつりけるなかに

めづらしきけふのかすがのやをとめを神もうれしとしのばざらめや

【参考】

忠房は御幸の当日に神楽が行われることを前提に予め当該歌を準備しておいたのであろう。恋歌仕立てで、供奉する女官たちを八少女になぞらえた点、忠房の配慮がうかがえる。なお、春日の八少女を詠んだ歌としては、他に、

今はとも いはざりしかど やをとめの たつやかすがの ふ
るさにと かへりやくると……

(拾遺・雑下・五七三・読人不知)。

などがある。

【本文】

返

左 持

2 やをとめをかみし、のば^ゞゆふだすきかけても^ぞこひむけふのく
れなば

【校異】

○左—左 ある本にち かへし ○も^そ—や ○くれなは—くれ^なをは

【通釈】

本当に八少女を神様が慕うのなら、木綿襷をかけてではありません
が、ひたすら心にかけても恋い慕いましょう。今日が暮れてしまっ
たら、来て下さい（お姿をお現しく下さい）。

【語釈】

○返 1の本歌に対する返歌の意。○やをとめ 御幸に供奉した女
官たち、つまり作者自身を喩える。1語釈参照。○しのば^ゞ 「し
のぶ」は思い慕う。「うしと思ふものから人のこひしきはいづこを
しのぶ心なるらん」（拾遺・恋二・七三二）。本歌の「かみもこひし
とおもはざらめや」を受けたものだが、「しのぶ」が仮定表現をと

ることは少ない。春日社の祭神に慕われるという恐れ多いことは万
が一にもあるまいが、もしあったとしたら、という心か。○ゆふだ
すき 「ゆふだすき（木綿襷）」は、木綿で作った襷。神事に奉仕
する時に、袖などをからげた。「掛け」の枕詞。神事との関係で
「八少女」「神」が縁語。結句「暮れ」の縁で「夕」を掛ける。「あ
さひやまふもとをかけてゆふだすきあけくれかみをいのるべきか
な」（実方集③一九）。○かけても^ぞ 「かけて」は、ひたすら心にか
けて。「いその神ふるの社のゆふだすきかけてのみやはこひむと思
ひし」（拾遺・恋四・八六七）。

【参考】

本歌の「八少女」「神」「恋し」「今日」を織り込んで詠む。本歌
が、春日の神が八乙女（女官たちをなぞらえる）を恋しく思わない
ことがあるのかと恋歌仕立てで詠んだのに対して、本当にそうなら
一心に神をお慕いしようという。「今日の暮れなば」の後に省略さ
れることは何かが問題だが、今日が暮れたら来て下さい、すなわち
神に姿を現してほしいということか。また、本歌「かみもこひしと
おもはざらめや」は、作者忠房の気持ち（無論、本心ではなく、女
官に対する挨拶だが）が込められるだろうから、それを受け入れた
（これも本心ではなく、忠房への挨拶）ということにもなる。もっ
とも、今日が暮れてしまったら、女官たちはもう春日にはいないの
であるから、その点からは忠房に切り返した、恋歌の常套的返歌と
もいえる。

なお、未然形接続の接続助詞「ば」が、短歌一首中に二つあるの
は珍しく、本歌合には他にない。三代集でも後撰集に、

時雨ふりふりなば人に見せもあへずちりなばをしみをれる秋は
ぎ（秋中・二九七）
があるぐらい。

【本文】

右

3 ちはやぶるかみしゆるさばかすがのにたつやをとめの
いつかたゆへき
たえむものは

【校異】

○右―右 ち 〇たえむものは―いつかたゆへき

【通釈】

神様がお許しになるなら、春日野に立つ八少女が絶えましようか、
いや絶えるようなものではありません。

【語釈】

○ちはやぶる 「神」の枕詞。○かみしゆるさば 2の「かみしし
のばば」同様、春日の神のお許しを得られればという、恐れかしこ
まりの表現だろう。○かすがの 春日野。大和国の歌枕。春日山を
とりまく山裾の野。春日野と八乙女とが詠まれた例として、「屏風
に、春日のまつりのつかひのかへりはべるところ／やをとめのかす
みもともにけふしこそかすがのべにたちわたるらし」（能宣集③
三三四）などがある。○たつ 風俗歌の「八少女は 我が八少女ぞ
立つや八少女 立つや八少女 神のやす 高天原に 立つ八少女

立つ八少女 ……」(二四・八少女)を踏まえた表現。本歌合後も、
「やをとめもけふやひとへに夏衣神のみそぎもいそぎ立つらん」(海
人手古良集・一一)のように、八少女は「立つ」と組み合わせられる
例が多く見られる。○たえむものは 反語表現。「延喜三年十月
十九日、おほせによりてうたみつたてまつる、女一のみこの裳きた
まふときに、うちよりさうぞくたまふ、そのもにみづくきかたきに
すれるうた／ながれいづるやまをしおもへばよしのがはふかきこ
るもたえむものは」(躬恒③一)と同様、当該歌でも祝意を表す。

【他出文献】

夫木抄・卷三十五・雑部十七・一六五七八

延喜廿七年三月五日京極御息所歌合 読人不知

ちはやぶる神しゆるさば春日野に立つやをとめのいつかたゆへき

【参考】

本歌「かみもこひしとおもはざらめや」に対して、神が許したら
八少女はいつまでも絶えることはありませんと応答し、神の意向を
受け入れる。神のお許しがあればこの八乙女は永遠に続くこと返した
のである。これは、そのまま女官を賛美した忠房への挨拶となる。
勿論、八少女の永続は春日社の永続であり、それは藤原氏と国家、
皇室(春日社は藤原氏の氏神であるとともに官社)の永続につなが
る。

持となった理由は確定しがたいが、恋歌仕立ての2、賀歌仕立て
の3とともに、本歌の趣旨を汲んで甲乙付けがたいとの判断か。

【本文】

本

4 さくらばなみかさのかけしやまのかけしここにあればゆきとふるともぬれじ
とぞおもふ

【校異】

○本—本二 ○ぬれし—ぬいろにぬれめやれし

【通釈】

桜花は、三笠の陰がここにあるので、雪のように降るとしても濡れまいと思います。

【語釈】

○さくらばな 三笠山と桜の組み合わせとしては、「さくらさくみかさの山のかはゆみを春のまとるにいとこそみれ」（応和三年宰相中将君達春秋歌合・九四）、「かくれたるみかさの山のみむしは花のふるをやぬるといふらん」（宇津保物語・一一九）などがあるが、少ない。万葉集に「能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも」（巻十・一八六一）があり、万葉代匠記（初稿本）以来これを桜と想定する説が多いが、梅や山吹とする説もあり、確実な例は本歌合までないようである。本歌合には4、5、6、28、29、30にあるが、この後も用例は少ない。おそらく三笠山に桜が咲いていた実景を詠んだために、こうした特殊な組み合わせができたのだろう。○みかさ 大和国の歌枕、三笠山のこと。古代から信仰の対象であり、本歌合にも九首に詠まれる。その名は、円錐形で笠を伏せたような形に由来する。天皇の玉座に天蓋があることから、

「春日を 春日野の山の 高座の 三笠の山に……」（万葉・卷三・赤人・三七二）、「大君の三笠の山の秋黄葉今日のしぐれに散りか過ぎなむ」（万葉・卷八・家持・一五五四）などのように、「高座の」（高座は天皇の玉座である高御座）、「大君の」は、三笠山の枕詞となる（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』平成十一年 笠間書院、『歌ことば歌枕大辞典』平成十一年 角川書店など）。平安時代にも、「おほきみかみかさの山をおびにするほそだにがはの音のさやけさ」（まがねふくきびのなかし）（人丸集・二三三。万葉集一一〇二の訛伝歌）、「おほきみのみかさのやまのほととぎすたづぬるほどのゆふ日さすらし」（江帥集・四六四）といった用例がある。当該歌もこのような三笠山のイメージに連なるもので、単なる笠との掛詞だけではなく、三笠山を宇多上皇の天蓋と見立てた。上皇が実際にいるからこそ、三笠山を天蓋と見る見立てに現実感がある。なお、普通は三笠山、三笠の山と詠み、当該歌のように単に三笠と言うのは稀。この点からも、山の天蓋への見立てが強調される。中世には、単に三笠という例は幾つかあるが、中古では「名のみして山は三笠もなかりけりあさ日ゆふ日のさすをいふかも」（拾遺集・雑下・五四七・紀貫之）があるぐらい。ただし、この歌にも「山」は詠み込まれる。なお、本歌合成立の契機となった御幸が三月に行われたので、本歌合では、いきおい三笠山は桜などの春の景物と詠まれる。しかし、三笠山自体は、春日と春とのように、特定の季節と強く結びことはない。○ここにかけし 上皇が実際に三笠山の麓にいるので、「ここに」という。臨場感ある表現。○ゆきとふるとも 落花を降雪に見立てる。三笠山と雨の組み合わせは典型的だが、雪との組み合わせは少なく、本歌合以前に確

実な例は見あたらないようである。家持集に「ゆきふらばたちもかくれんかすがなるみかさの山のすゑのまつばら」(二八二)があるが、この家集の成立は古今六帖から拾遺集の間に成立し、二八一はその後に増補された私撰集中の歌なので(島田良二『家持集全釈』平成十五年 風間書房)、当該歌より後の用例となる蓋然性が高い。また、この後にも、平安時代では「後一条院の御時、はじめて春日社に行幸ありけるに、一条院御ときの例をおぼしいでさせ給うて、よませ給うける／みかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとをたづねて」(千載・神祇・一二五六・上東門院)があるぐらい。これも、一義的には「行幸」であり、「跡」の縁語「雪」を掛けたに過ぎない(新大系)。三笠山と桜、雪の組み合わせは、本歌合にほぼ限られた特殊なものといえる。これも、おそらく実景であった三笠山の桜を雪に見立てたので、実現した組み合わせだろう。「故郷の雪いかならしかすがなるみかさのやまをおもひこそやれ」(匡衡集・八五)。本歌合29にも同じ句がある。なお、花と雪の見立てについては、鈴木宏子「雪と花の見立て」考―万葉から古今へ―(『古今和歌集表現論』平成十二年 笠間書院)に詳しい。〇とぞおもふ 本歌合の22、25、27の歌末に同じ。その内、当該歌、25が忠房作、22が躬恒作の本歌である。これらは、「―じとぞおもふ」という句や、接続助詞「ば」が統括する条件句をもつ。しかも、条件句には、「みかさのかけしここにあれば」(当該歌)、「きみがなほかくしかよはば」(22)、「はるごとなきみしかよはば」(25)と、必ず副助詞「し」を伴う。「―む(じ)とぞおもふ」は王朝和歌に目立つものであり(秋本守英「歌末表現と距離―萬葉集八代集を通し

て―」。『表現研究』昭和四十年三月)、平安時代では副助詞「し」が単独で使われる場合、もつばら接続助詞「ば」とともに用いられる。したがって、本歌合のこの型は、王朝和歌によくある形をパターン化して用いたものといえる。

【他出文献】

拾遺集・卷十六・雑春・一〇五六

さくら花みかさの山のかげしあれば雪とふれどもぬれじとぞ思ふ

新千載集・卷二・春下・一五二

京極のみやすむ所春日にまうで給うけるとき、くにの官二十一

首歌よみてたてまつりける中に、桜花みかさの山のかげしあれば

ば雪とふるともぬれじとぞ思ふ、と侍りける返しの歌

よみ人しらす

木のまより花の雪のみちりくるはみかさの山のもるにやあるらん

新撰和歌・卷一・春秋・八七

さくら花みかさの山のかげしあらばゆきとふるともいかにぬれめや

【参考】

「みかさのかけ」「ゆきとふる」「ぬれじ」などに祝意が込められる。三宅和朗によれば、古代の春日社信仰には、神殿を中心とする信仰と、春日社創建以前から続く三笠山を中心とする信仰とが併存していたという(『古代春日社の祭りと信仰』。『史学』平成十三年十二月)。とすれば、本歌合の冒頭に春日の神と三笠山を詠んだ歌を並置するのは、そうした信仰のあらわれといえる。

【本文】

左

5 このまよりはなのゆきのみちりつるはみかさのやま
のもるにざるべき
 をさしてきにけり

【校異】

○左―左 かへし ○はなのゆきのみ―はなのゆきのみ ○ちりつ
ちるは―もりくるは ○をさしてきにけり―のもるにざるべきもるにざるへき

【通釈】

木の間から花の雪ばかり散ったのは、（その名にもかわからず）三笠の山が漏れるに違いない。

【語釈】

○このまよりはなのゆきのみちりつるは 木の間から散る花を雪と見立てる。「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」（古今・冬・三三二・紀貫之）、「このまより自木間ふきくるかせに吹来風丹ちるときは雪裳花砥曾ゆきもはなとぞ見江惑介留」（新撰万葉・四三三二）のように、散時者ちるときは雪裳花砥曾ゆきもはなとぞ見江惑介留みえまどひける（新撰万葉・四三三二）のように、木の間から降る雪を花と見立てる例はあるが、当該歌のような逆の例はまれ。三笠山と桜の組み合わせに関しては、4の語釈参照。○みかさのやま 4の語釈参照。○をさしてきにけりのもるにざるべき 本本文文では解しがたい。次の6と第四、第五句が同一だから、目移りによる誤写の可能性が高い。したがって傍記本文に従う。「ざるべき」は「ぞあるべき」のつづまった形。

【他出文献】

新千載集・卷二・春下・一五二

京極御息所春日にまうで給ひける時、国の司廿一首の歌よみて奉りける中に、桜花みかさの山のかげしあれば雪とふるともぬれじとぞ思ふ、と侍りける返しの歌

よみ人しらず

木のまより花の雪のみちりくるはみかさの山のもるにやあるらん

【参考】

本歌が三笠山のおかげで「ぬれじとぞおもふ」としたのに、当該歌は「三笠の山のもるにざるべき」と返す。本歌合の本歌では、

さくらばなゆきとふるめるみかさやまいざたちよらむなにかく
 るやと（28）

ちりまがふかすがのやまのさくらばなひかりにたへぬゆきとみ
 えつつ（37）

みゆきふるかすがのやまのさくらばなえだぞみわかねこきませ
 にして（58）

と、降る雪に見立てられた散る桜が詠まれるので、御幸当日春日の桜は散っていたとも推測される。本歌合の桜が実景であるとの推測が正しければ、当該歌は、御幸当日の実景から本歌に異を唱えたものか。しかし、それは本歌の祝意をも打ち消すことになるから、負けとなったのだろう。

【本文】

右勝

6 すがのにゆきとふるめるはなみにぞみかさの山をさしてき
けり

【校異】

○かすかのに—かすかの、 ○ゆきとふるめる—ゆきとふるといふ
○さしてきにけり—さしてきにける

【通釈】

春日野に、雪のように降ると見える桜花を見るために、（笠を差し
ながら）三笠山を目指してやって来たのですねえ。

【語釈】

○ゆきとふるめる 本歌4の「ゆきとふるとも」をうけ、桜花を雪
に見立てる。「める」は視覚にもとづく推量を表す。○はなみにぞ
「ぞ」は強意。春日野と春の花との配合は、「見渡せば春日の野辺に
霞立ち咲きにほへるは桜花かも」（万葉・卷十・春雑歌・一八七二）
など万葉集では散見されるが、当代和歌ではあまり例を見ず、本歌
合歌以外では「わかなつむ春のたよりにかすがのの花の心はしりに
しものを」（古今六帖・五・みちのたより・2851・貫之）、「いづれを
か花とはわかんふるさとの春日のはらにまだきえぬゆき」（躬恒集
⑦三二）を見るに過ぎない。もつとも、後者は雪を花と見紛うと詠
んだものであるから、当該歌とは逆の発想である。○みかさの山
4の語釈参照。「笠」の意を掛ける。○さしてきにけり 三笠山を
目指して、春日野にやって来たきたのですねえ。「さし」は目指す

意に笠を差す意を、「き」は「来」に笠をかぶる意の「着」を掛け
る。「君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも」
（万葉・卷十一・寄物陳思・二六七五）。「笠」「差し」「着」は縁語。
「けり」は校合本文の「ける」の誤か。「きにける」だと4の内容を
受け、「言われてみれば、私たちは花見にも来たのだった」と、初
めてその事実気づいた意を込めたことになる。

【参考】

当該歌は本歌と同様、笠ゆえに「ゆきとふる」花を遮るといふ発想
に拠っているが、行幸を花見によそえ、「さし」「き」の掛詞を巧み
に用いた点に一首の眼目をみる。それが勝となった理由であろう。

なお、

はるさめのふるのみやまのはなみるとみかさのやまをさしての
みこそ（好忠集・毎月集・五九）
は当該歌を踏まえて詠まれたものか。

【本文】

7 本
はるたてるみかさのやまのしらくもはみゆきさぶらふさくらな
りけり

【校異】

○本—本三 ○はる—やへ ○みゆきさぶらふ—みゆきにならふ
まか

【通釈】

春に立ちこめて三笠の山の白雲は、御幸をお迎えする桜の花だつたのですね。

【語釈】

○はる^{やへ}たてる―春に立つた。雲が立ちこめるのを、「立つ」という。「春立つ」を含む句はよく使われるが、「はるたてる」という句は、中古、中世を通じて他に見あたらない。○みかさやま―4の語釈参照。○しらくも―桜を白雲と見立てる。花を雲に見紛う歌には、「桜花咲きにけらしなあしひきの山の峡より見ゆる白雲」（古今・春上・五九・紀貫之）、「み吉野の吉野の山の桜花白雲とのみ見まがひつつ」（後撰・春下・一一七）などがある。ただ、三笠山の桜を白雲に見立てる例は、当代では他に見あたらない。○みゆき―御幸。「みゆき」は本歌合では、16、17、31、49、50に見られる。○さぶらふ―貴人に伺候する。ここでは、折良く咲く桜を、御幸をお迎えすると擬人化して言う。○さくら 4の語釈参照。○なりけり―「AはBなりけり」は、和歌の類型表現の一つ。平安時代の和歌では、「AはBなりけり」が、「AとBとの間に普遍的なものとして存在していた思いがけないつながりを、今に至って認識した、という意味を表す型として用いられた」。この表現で、実は「AとBとのつながりを創作するの」だという（以上、『日本語文法大辞典』の秋本守英執筆「なりけり」の項目。糸井通浩『なりけり』構文―平安朝和歌文体序説『京都教育大学附属高校「研究紀要」第六号参照』。当該歌では、「はるたてるみかさのやまのしらくも」が桜だったことに、今日の御幸で初めて気づいた感動を表現する。実は、ここに

は、万葉集以来詠まれる三笠山の雲（参考参照）と、三笠山とは一般的には組み合わされない桜とを見立てて関係づけ、しかもその桜を「みゆきさぶらふ」と意味づけたという創作がある。この見立ては、初句「はるたてる」というように、この御幸が行われた春でしか実現しないだけに、時宜を得たものと言える。なお、「AはBなりけり」の型は、本歌合では当該歌以外にはない。

【参考】

① 御幸の今日、三笠の山の白雲がお迎えの桜であると気づいたという。これは、とりもなおさず作者忠房の御幸への祝意の表現である。

②三笠山と雲の組み合わせは、

春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝去らず 雲居た
なびき ……（万葉・卷三・三七二・山部赤人）

君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも

（万葉・卷十一・二六七五）

しら雲のみねにしもなかよふらんおなじみかさの山のふもと
を（新古今・恋一・一〇一一・藤原義孝）

などのように、万葉集から見える。

雲が立つ山は、

やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高み
雲そたなびく ……（万葉・卷六・山部赤人・一〇〇五）

と高い山で、

朝日さす そがひに見ゆる 神ながら みに帯ばせる 白雲
の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 ……

(万葉・卷十七・大伴池主・四〇〇三)
難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲そたなびく

のように、神聖な山として詠まれることがある。
(万葉・卷二十・四三八〇・大田部三成)

三笠山が信仰の対象であることを考えれば、当該歌も、高く神聖な山には雲が立ちこめるといふ伝統をひくものといえる。

【本文】

左勝

8 よそにてもきみしみつれば山ざくらこゝろやすくやいまはちるらむ

【校異】

○左勝―左かつ かへし ○山ざくら―^山ざくらはな ○こゝろやすくや―心やすくくや

【通釈】

たとえ遠くからでも大君が御覧になったのですから、(あの御蓋山の)山桜も今頃は心残りなく散っていることでしょうか。

【語釈】

○よそにても 遠く離れていても。御蓋山は春日大社の後方に位置することから、法皇は山の桜を遠目に見たのであろう。○きみしみつれば 「きみ」は宇多法皇。たとえ遠くからでも法皇が御覧になったのだから、とその威徳を強調。「し」は強意。○山ざくら 前

歌で「みゆきさぶらふ」と詠まれた御蓋山の桜。○こゝろやすく安心して。心穏やかに。山桜を擬人化する。「おもひいでのうきせはいつかわたりがはこころやすくはわたりはつべき」(忠岑集・八六)、「あさぢはらぬしなきやどの桜花心やすくや風にちるらん」(拾遺・春・六二・惠慶法師)。○いまはちるらむ 「いま」は法皇が還御された時点。法皇が御覧になるといふ光榮に浴したのだから、今は安心して散っているだろうか、の意。

【参考】

上句は春日行幸時に法皇が御蓋山の桜花を遙かに見やる様を詠じ、下句は法皇還御時における桜花の状態を「心やすく」「散るらむ」と推量する。本歌の内容を踏まえつつ、祝意と時間的推移を巧みに盛り込んだ点が勝となった理由であろう。

なお、山桜を「よそに」に見ることをうたった同時代詠としては、よそにのみみてややみなむやまざくらはなのこころよのましらぬに(躬恒集③一一六)

人の木のもとに立ちてはるかなる桜の花をみたる

山ざくらよそにみるとすがのねのながき春日を立ちくらしつる(貫之集③六一)

がある。

【本文】

右

9 やへたてるくもに見えし^{ゆる}さくらばな^へかゝる^{もと}たむけ^いにけ^いふ^まやち

るらんくる

【校異】

○見えしゆる—みえしゆる ○かかるかへり—かへり ○たむけもとに—たむけむけ
 ○けふいまぞやちるらんくる—いまそちりける

【通釈】

幾重にも立っている雲に見えた桜花が、このような数寄を凝らした御饒別のように、今日きれいに散っているだろうか。

【語釈】

○やへたてる 雲が幾重にも重なり立つ様。「たてる」は、本歌7の初句に同じ。八重立つ雲は、古今集序文の古注にも引く、素戔嗚尊くしなだひめが奇稲田姫と住むための宮を造ったとき、周囲から雲が沸き立った様を詠んだ、「やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを」のように、祝意が込められる。「やへたつ」の用例は多いが、それに助動詞「り」が下接する例は極めて少ない。当該歌が初めての例か。「身をうしと人しれぬ世を尋ねこし雲のやへ立つ山にはあらぬ」(後撰・雑二・一一七三)、「ここやいづこあなほつかなしら雲のやへたつ山をこえてきにけり」(古今六帖・一・くも・五二二)のように観念的に詠まれることが多い八重立つ雲を、「やへたつ」という事態が既に実現し、それが今も続いていることを表現する助動詞「り」を下接することで、幾重にも重なる雲、ひいてはそのように見える桜を臨場感ある情景として表現しようとしたか。○くもゆるに見えしゆる 「くもゐ」は雲。本歌の「しらくも」に対応。「見えし」と過去の助動詞を使うのは、本歌7が詠む

ように、三笠山の桜が、それと気づく以前は白雲に見えていたから。○かへりるたむけに 「かかる」は、このような。「たむけ」は饒別。この句は意味をとりがたいが、以下に試解を示す。仮名日記に「かたみをいとをかしげにつくりて、おほんくだものいれたり」とあり、この果物籠について、萩谷朴は、「恐らく、還幸の徒然をお慰めする心からであつたらう」と推測する(大成)。これに従えば、「かかるたむけ」とは、この果物籠を指すのだらう。格助詞「に」は、「逢坂をうち出でて見れば近江の海白木綿花に波立ち渡る」(万葉・卷十三・三三三八)、「いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる」(古今・雑下・九三四)などと同じく、「…のように」と物事の状態を他にたとえて示す。果物籠の趣向が桜花にちなむものだったか。○けふいまぞやちるらん 今日の落花を推量する。「けふ」と現在推量の助動詞「らん」とは、第二句の過去の助動詞「し」に呼応して、本歌7からの時間経過を示す。

【参考】

第四句の意味をとりがたいが、本歌で白雲と詠まれた、すなわち満開の桜が、今日は散っていることを推量する歌である。第四句を語釈のようにとれば、落花を果物籠で喩えるのは、贈り主忠房への御礼であり、果物籠の趣向の称讃ということになるだらう。

遠く雲のように見える三笠山の桜だから、実際に今日散っているかどうかはわからない。しかし、助動詞「らむ」を用いて、還御の日の今日こそ散っているだらうと推量したわけである。ここには、御幸への祝意も込められていよう。また、本歌では三笠山の神々しさの表徴だった白雲に、「やへたてるくも」と応ずることで祝意を

添加したといえる。

こうした祝意の表現は、勝となった左歌が「きみしみつれば—こころやすくやいまはちるらむ」と、上皇や御息所の偉大さを詠むことで、祝意を直接表現したのに比較して、間接的である。これが、当該歌の負けた原因だろう。